法事をつとめる

慶讃法会（きょうさんほうえ）おはなし三

聖徳太子一四〇〇回忌法要

本山佛光寺

慶讃法会基本理念

「大悲に生きる人とあう　願いに生きる人となる」

2023年（令和5年）、本山佛光寺は、慶讃法会として宗祖親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年、聖徳太子1400回忌に併せ、第33代真覚門主伝灯奉告法要をお勤めします。

私たちの生活は、人工知能（AI）をはじめとするテクノロジーの発展により、想像もつかないほど便利になりました。

ところが、相変わらず心の平安は得られず、生きている意味を見失い、生かされている事実を忘れ、傷つけあっていることさえも気づかず、互いに孤立を深めています。

世の中が移り変わり、どのような境遇にあっても、阿弥陀さまの大悲のお心に生きられた親鸞さま。そのおすがたに流れるお心を、自らの願いとして生き抜かれたのが私たちの先人であり、今の私に届いている南無阿弥陀仏の歴史であります。

それは、思いを超えたはかり知れない命との出遇いであり、その命の願いに生きることが、苦悩の中を生きる力となるのです。

時と処を超えて、人から人へと伝わるともしびを、「大悲に生きる人とあう　願いに生きる人となる」と掲げ、このたびの法要をご縁に歩んでまいりましょう。

本山佛光寺

〒600-8084　京都市下京区新開町 397

Tel.075-341-3321 ／ Fax.075-341-3120

http://www.bukkoji.or.jp/

聖徳太子立像（重要文化財 佛光寺蔵）

聖徳太子は、世間の真っただ中で、世間を超えた仏を真の拠り所（よりどころ）として生きられました。そのお姿は、太子を敬（うやま）われた親鸞聖人の上に「ただ念仏」の教えとして開かれました。太子滅後一四〇〇年という長い時がすぎ、生活や社会の仕組みは変わりましたが、人々に生きてはたらき続ける教えは変わりません。

故人を偲んで勤める年忌法要、年回ともいわれますが、準備が大変なこともあり、ともすれば亡き人のために、私たちが勤めなければいけない義務のような印象を受けます。けれども、そうなのでしょうか？

年忌法要は誰のため？

大切な人との悲しい別れの後、数年に一度の間隔で勤める法要。時には故人と面識のない人がお参りをすることもあります。「会ったことはないけれど、親戚になったから」「付き合いだから仕方ない」と、身を運ぶ。

それだけでなく、病気など嫌な問題が続くと、「法事を忘れていた！」と慌てて勤めることも。先祖を供養することによって、生きている私たちが幸せに暮らせますように。祟らずに、見守ってください。そんな思いが、透けて見えるようです。

はたらき

先日、小学校の同窓会が行われました。一学年一クラス、クラス替えもなく六年間を一緒に過ごしたのに、三十年以上経つと、クラス全員の名前を思い出せません。存在を忘れてしまった人とは関わることができませんから、思い出せないということは、亡くなったも同じこと。悲しい言い方ですが。

それに対して、若くして病気で亡くなったクラスメートのことはよく覚えています。姿はなくとも、思い出すところに、彼の存在と関わることができます。それは霊魂といったものではなく、この私に関わる「はたらき」です。法事の中心におられるのは間違いなく故人です。その方がおられなかったら、法事をお勤めすることもありません。つまり、その場に身を運ばせた「はたらき」があるのです。それは、亡くなっても、決して無くならない、故人のいのちの「はたらき」です。

いのちの事実

そんな目に見えない「はたらき」によって知らされるのは、私のあり方です。都合の悪いことがおこると、亡き人に祟られているのでは？と怯え、反対に良いことがおこると、ご先祖様のおかげだと祀り上げる。自分の都合で、故人を鬼にも神にもしてしまう。

まるで、いのちを評価し、量っているようですが、実はそのことにも気づいていないのです。そんな私たちに、「量ることのない」いのちをいただいているのだと、いのちの事実を喚びかけてくださるのが故人であり、聞かせていただくのが法事の場です。

ですから故人と面識があるかどうかは、実は重要なことではないのです。ご縁の中でお参りをさせていただく。そこで知らされるのは「量ることのない」いのちをいただいている、わが身の事実。そう、法事は他でもない、この私のためのものだったのです。